

## 編 集 後 記

今年から外科系の編集委員として参加させていただいている。成人心臓外科にはない小児心臓外科の魅力の一つとして、数多くの論文を読むほど、確実に目の前のお子さんに良い結果を提供できることです。重症例や希少疾患に遭遇したとき、自施設での経験を振り返るのは勿論ですが、論文を読み漁り、自身の力量、チーム体制から実現可能な治療戦略を選択する。また、やや批判的な目線で論文を読み、自施設に採用すべきか、どのような症例には注意を払うべきか見極めるのも危険予知トレーニングの一環です。

そういう意味では最近の纏まり過ぎた論文よりも、少し古い論文のほうが自身の臨床判断の拠り所になっています。論文を書く上では良い結果が揃ったものを書くのは筆も進みますが、好ましくない結果を含む論文は筆が進まない上に、査読も厳しく、受理されるまでに多くの労力を要します。しかしながら、そういう論文こそ臨床上の判断材料として活用されるはずです。

編集委員を拝命してから、改めて本誌に掲載された論文の英文誌にはない詳細な記載に驚かされます。苦慮して治療された症例をお持ちの先生は是非その経過を詳細にまとめて本誌に投稿して下さい。本誌が小児心臓外科の先生方にもより有益な情報源となるようお力添えさせていただく所存です。

(松久弘典)